
モルモットモード

紺とすん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モルモットモード

【Nコード】

N1671Y

【作者名】

紺とすん

【あらすじ】

シオリ（高校一年）のよくある感じの二度目はつこい。
なんとなく丸めこまれて、ばかっふるが誕生してしまうやや迷惑な話です。

(1) ひなたぼっこは終了なのか

あ、あくびしてる。眠いのかな。

なかなかいいものを見た、と頷きながら、シオリは現国のテキストに目を戻す。

今の席は、窓際の一番うしろ。それだけだって、一番前の席なんか比べれば、ずいぶん恵まれている。しかも、黒板の方を見るような感じでさりげなく斜め前方に顔を向けると、その姿が嫌でも目に入る。むしろ、それを鑑賞するための席ですらある、と思える。

シオリが眺めている人は、草木君という。太陽の陽に多いで「ひなた」と読ませる名前がよく似合っていたその人のことを、今では必要があるときだけ、草木君、と呼ぶ。だがその昔、「ヒナ君」なんていう呼び方をしていたこともあったのだった。

逆にシオリの方だって、昔はうるさいぐらいに「シオリちゃん、シオリちゃん」と呼ばれてまわりつかれていたのに、今ではただ平板に姓の方で呼ばれるだけだ。

それもそのはず、そんな呼び方をしてたのは、もう八年ほども前の話。八年っていったら、自分のジンセイの半分。いろいろ変わって当然だよな、とシオリがため息をついたところで現国教師とばかり目が合い、あわてて厳しい表情をつくってみた。

「おい、オレだって人間だぞお、授業中にそんなにたそがれちゃうなら、成績だってたそがれちゃうよ」

そう言った現国教師は、まだ二十代で男性ということだけで生徒から結構人気だ。今も教室各方面から好意的な笑い声があがってる。その発言の元凶となったシオリの方を振り向いて見る顔のなかに草木君の顔も混じっていて、一瞬目が合ってにやりと笑われてしま

った気がする。

そこでシオリはまた、何回目かの決意を新たにする。あの姿を目に映さないようにして黒板だけ見ること。こう顎をあげるようにすればいいんだ、顎を。

と実演しているところにまた草木君が振り向いたのが視界に入り、今度はあきれたような顔をされてしまった。

おかしいなあ、昔はもっと立場が対等だった気がするんだけど。なんだか自分が随分つまらない存在に思える。「ごみ箱のフタ」というフレーズが浮かんて、シオリは慌てて頭をふった。

シオリには、歳が三つ離れた兄がいる。現在大学一年生で、実家を離れて一人暮らしをしているため、最近の様子はシオリにはよくわからない。

通っていた高校はシオリと別だが、高校時代は生徒会でも活躍し、成績もまあまあ優秀、スポーツ関係はけっこう得意、ということでは人望と人気があった。

ということ、少なくとも両親は信じてる。

現在、若干十六歳のシオリは、この優秀な兄や父、幼少時の経験のおかげで、同級生女子よりは男子に関する深い洞察を得ることができる。

要約すれば、その内容はだいたい次の二点におさまった。

まず、男というものは、思ったよりもバカである（これは成績の良し悪しとは無関係）。

二つめ、男というものは、女子の基準に照らせば、ほぼ変態である。

たとえば、ご近所からも優秀だと羨まれた兄の部屋からは、しょっちゅう妙な笑い声が聞こえてきていた。去年だったか、「せんぱ

い、あなたはゴミ箱のフタなんかじゃありません」などという怪しいセリフを何度か言われたこともある。土下座までして頼まれて、そう言うだけで一回につき、百円くれた。

そのうえ、兄の場合、妄想が口から洩れてしまうことがままあるらしく、それを聞いてしまったときなんかは、最悪の気分になったものだった。

ちなみに、シオリの父親と兄は性格がよく似ている。父親は事務所を構えて堅い仕事をしているはずだが、シオリから見れば娘の前で下ネタを得意げに披露するヘンな人にすぎない。母親は天然だが、基本的にはテンションが低い人だ。普通に恋愛結婚だというが、母が父の何に魅かれたのか、シオリにはさっぱりわからない。

そして、母親の性格から天然なところを差し引くとできあがるのが、自分の性格だ、とシオリは思っている。いや天然なところまでそっくりだ、などと親戚には言われるが、それについては納得しかねていた。

いずれにしろ、地の性格のままだといろいろうまく回らないことも多いので、普段は多少、テンションを上方修正、偽装のうえで生活している。これはシオリだけでなく、多かれ少なかれ、みんながやっていることだろう。

ここで問題は、偽装の方の自分にホンモノがすっぽり隠されてしまふことがある、ということだった。

最近やたらと草木君が気になるのも、偽装の方の自分の気持ちに違いない。中学時代なんて、自分の深い洞察にしたがって、男子とはすっぽり無縁の生活を送っていたんだし。

と、いつようなことを考えてるところで、授業終了のベルが鳴った。

なんか疲れた、とシオリは机につつぶした。

「シオ」

明るく呼ぶ声がして、シオリがもっさり顔をあげると、さやかがちゃっかり前の席に座ってた。

「いいな、二ノにマークされて。わたしもタチバナじゃなく二ノにマークされたい」

二ノというのは現国教師二ノ宮の通称、タチバナは英語の女性教師だ。

「ダメだよさやか、二ノなんて枯れ木の中にいるからマトモに見えるだけでしょ？」

「枯れ木ってそんな。先生はともかく、男子はみんな、二ノより若いよ。別に二ノじゃなくて男子でいい、いや、男子がいい。たとえば」

例としてあがった三人ほどの男子の名前の中に、当然のように草木君の名前も入っていて、昔は目立たない子だったんだけどなあ、とシオリはまた遠い目をする。

「あの、今の三人には何ら趣味の統一性が感じられないんですけど」

「ねえシオリ、今の三人全員、顔と名前は一致してて言ってる？」

「・・・さやかさすが。すいません、適当なこと言いました」

実はシオリは、草木君以外は誰のことかわかっていなかった。

「だと思った、有名人ばかりなのに。まだみんなフリーだし。もうちょっとそっち方面も興味を持とうね」

「うーん」

「なによ、例のバカヘンタイ説？ まあそついうヤツもいるだろうけどさ」

「それがね。最近、自分の方がバカヘンタイかもしれないって思うこともあるんだよね・・・」

つい草木君の方を見ちゃうときとか、とシオリは心の中で思った。「うそつ。もしかして、とうとう目覚めた？ 相手だれ？」

ちょうどそのとき、シオリの席の横を草木君が通り過ぎて行った。

「そうつわけじゃ・・・」

「ほお。ところでさ、わたしの方は、聞いて欲しいことがあって。

放課後、ちょっとだけいい？」

シオリが頷くと、さやかはさっさと自分の席に引き揚げて行った。

(2) あの頃は仲良しだったのだ

小学二年生の頃まで、シオリと草木君は同じマンションに住んでいた。幼稚園も同じで母親どうしも仲が良く、二人が一緒に遊んだり、登下校したりすることも、ごく自然なことだった。

その頃のシオリは体を動かすことも好きで、活発なタイプだったが、じゃあ遊び友達も活発なタイプが多かったかと言うと、そうではなかった。

むしろ、うるさくてガキっぽいクラスの男子全般が苦手だった。そんな中であって、当時のシオリの呼び方をすればヒナ君は、下手な女子より穏やかで繊細な感じの子どもで、シオリの一番の仲良しだった。

その頃のヒナ君は、体が弱くてひよろつとした体型をしており、遠視用のメガネをかけていた。そのメガネを通して見るヒナ君の目は、ぼわつと大きくやさしく見えて、シオリは好きだったのだが、他の男子からはじいちゃんメガネだ老眼だからかわれて、一人前に扱われていないようなところがあった。

女子は口に出してからかうことはしなかったものの、何か言われても言い返しもしないヒナ君は、やはり今みたいに目立つ存在ではなかった。

ちよつとは言い返せばいいのに、とシオリだって思わないこともなかったが、当のヒナ君は「大きくなったら、このメガネはいらなくなるんだって。だから別に気にしない」などと平然としていて、言い返すのはもっぱらシオリの役割だった。

たしかに今ではメガネをかけていない。あの鋭い感じの目がいいなんていつてる同級生もいるが、シオリは当時のぼわつとした目にまた会いたいな、と思う。だからといって今の草木君が嫌だというわけじゃないのだが。

もし同じマンションに住んでいなかったとしても、やっぱりある程度は仲良くなっていただろうと思うが、毎日のようにお互いの部屋を行き来して遊んだりできたのは、やはりご近所さんならではの。だった。

遊ぶと言っても、マンガを読んだりゲームをしたりするシオリの横で、ヒナ君は静かに本を読んだりしているだけのことも多かったが、一番印象に残っているのは、マンションの通路から見た外の景色だ。

ヒナ君のところはマンションの三階、シオリのところは十階、つまり最上階にあつて、シオリ宅の前の通路からは、けっこう遠くまで景色が見渡せた。

そこに並んで立つて外を見て、建物の数をかぞえたりすることもあれば、夕日があたつて不思議な色になった雲を黙って眺めるようなこともあつた。夏には遠くの花火だつて見えた。

そんなふうには仲の良かった二人だが、つまらないできごとをきっかけになんともなくよそよそしい雰囲気になり、しまいにヒナ君は「マンション買ったんだ」と言い放つて隣りの小学校に転校してしまった。

そう言われて初めて、自分が住んでいるところがチンタイだということを知ったシオリだったが、結局仲直りできないまま離れてしまったのは、シオリにとって苦い思い出だった。

そのつまらないできごとが起こったのは、暑い夏のこと、あともう少して夏休みという頃だった。

教室で、さあ次は楽しみにしていた水泳の授業だ、と思ったときに、水泳バッグがないことに気がついた。朝はしっかり持って出たはず。誰かがふざけて隠したに違いない。

そう思ったシオリは、クラスでも中心的なタイプの男子から問い詰め始めた。それでも見つからずに、本当は忘れたくせに、などと言われ始めたところに先生が来て、先生がかわって皆に聞いたが、

結局それは出てこなかった。

そのとき、お調子者の男子の一人が「こいつの水着、ヘンシツシヤに盗られちゃったんだ」などと言い始め、変質者だ変態だと、大騒ぎになってしまった。たしかに何年か前にそんな事件があったらしいが、普通に考えて、その日にそんな隙があったはずはなかった。結局、家に忘れたかもしれない、その日のプールは見学、ということに収まったところで、シオリは思い出した。そうだ、今朝登校するとき、ヒナ君にちよつと持ってもらって、そのままになってたはずだ。そう思ってヒナ君の方を見ると、真っ赤になってうつむいている。

やましいことがないなら、言ってくればいいのに。そうしたら、自分はこんなにかかわれずに、プールにだって入れたはず。

シオリは猛然と腹を立てた。もしかしてヒナ君も、そのへんの男子と同じなのかも。

要するにシオリはそれまで、ヒナ君を男の子だとは思っていなかった。だから余計に頭にきたのだった。

シオリはその場で追求こそしなかったが、その日のプールを同じく見学していたヒナ君が、プールの授業中、すぐそばに座っているも、一言も口をきかなかった。

一方、ヒナ君には、やましいことなんて何もなかった。ヒナ君がスク水の魅力になんとなく気付いた気がしたのは、それから何年もしてからだったから。

それはさておき、水泳バッグに特別な思い入れなど何もなく、単純に忘れて自分のロッカーに突っこんでいただけのヒナ君だが、あの場で申し出れば、自分がからかわれるのは目に見えていた。メガネや体が弱いことからかわれるのは平気でも、それは絶対に嫌だった。

だが、その辺の複雑な心理をシオリにわかれといっても無理な話。その日はヒナ君と別々に帰宅すると、自分のところの玄関ドアの

前に、水泳バッグをかかえて立っているヒナ君の姿があった。何か言いたげなヒナ君を無視してバッグを奪い取ると、一人、無言で中に入ってしまった。

後ですこし冷えた頭で考えて、ヒナ君が自分に意地悪をするはずがないと、思いはした。それでもなんとなく裏切られた気持ちには消えず、自分から先ほどの態度を謝ろうとする気にはなれないシオリだった。

結局、その後の夏休み中にヒナ君の引っ越しが決まってしまう、例のマンション買った発言があつて、仲直りの機会は失われてしまった。それ以降のヒナ君のいない生活は、随分つまらなかつた。

次にヒナ君を見かけたのは中学生になってからだった。中学校も別々だったので、たまたま見かけたのだが、ずっと気になっていてまた前みたいに友達になりたいと思っていたのに、そのときは話しかけることができなかった。

この春、同じ高校に入学したことがわかったときはかなり驚いたし、しかもクラスまで同じになった。しかし、すっかり変わって精悍な感じになってしまった「草木君」とは、会えばあいさつする程度の間柄でしかなく、当人は昔のことなどすっかり忘れているように見えた。

(3) 負けたとか勝ったとか

放課後。気がつけば今年ももう十月半ば、窓の外に見える木々は地味な色になっていて、教室にいても、今日なんかは少し肌寒いくらいだ。

人気のない教室で約束どおり、ぼおつとさやかを待っていると、いったん部室に行って来たらしいさやかが「待たせたよ」と言っ
て入ってきた。

さやかは天文部に所属している。あまり天文部っていう柄でもな
いと思うんだけど、と言ったら、お菓子が食べ放題なんだよ、と返
された。ちなみにシオリは、陸上部に入部しようかどうかどうしようか迷
った揚げ句、帰宅部だ。

「シオリさんにご報告があります。わたし、彼ができましたっ」
そんなことじゃないかとシオリは思っていた。

「はいはいおめでとう。前にアドレス交換したっていう天文部の先
輩？」

「そうだけど、なんでそんな棒読み？ 昨日呼び出されて、そつい
うことになったのよ」

「二ノだの三人の有名な人だのは何だったのよ」

「それはあれ、実用、観賞用、保存用？」

「はあ、そうなのかあ。遠くに行ってしまったんだね、さやかは」

「へへへ。誰か他の先輩、紹介しようか」

天文部の彼。ロマンチックで遠大なヘンタイなのか。それはどん
なもんだろう、とシオリは思った。

「遠慮しとく」

「そつえば、自分がバカヘンタイな気がするって言ってたっけ？
それはね、誰かを好きになれば皆オナジ。ある意味当然。ま、何

かあったらこのおねいさんに相談して」

きれいに透明グロスをぬったくちびるに、聖母のようなほほ笑みを浮かべると、わざとだろうが、やたら上から目線でさやかが言った。

「はいはい、ありがとう」

「そういうことなので、部活がない日も一緒に帰れないことが多くなるけど、泣かないでよ」

「はいはい、お気づかいありがとう」

「シオリもなんでもかんでもバツサリ断っちゃうの、いい加減やめるんだよ？」

「はいはい。さやか、今日はいつもよりかわいいよ」

でもちよつと泣いちゃおっかなあ、なんて思いながら、元気に教室を出ていくさやかを見送ったシオリだった。

一人で昇降口を出て、校門の方を見やると、ちょうどそのあたりに草木君の後ろ姿が見えた。何かにつまづいたのか、ちよつとこけた。こけた次の瞬間には、まるで何もなかったかのように歩きだしている。

またしてもいいものが見られた、とシオリはひそかに喜ぶ。よく騒がれるような、部活中だの体育の授業中だの、はたまた長い足を組んで壁によりかかっている姿なんかより、こういうちよつとボヤっとして無防備な姿の方が、昔のヒナ君みたいでシオリは嬉しい。

余談ながら、草木君は卓球部に所属している。

自分はもてようと思っただけから卓球部なのにもてちゃってますと言う感じが悔しすぎる、とクラスの男子が言っていた。

中学時代は別のスポーツをやっていたらしく、きまぐれみたいに入った弱小卓球部で、卓球というマイナースポーツをわが校におけ

るメジャースポーツに押し上げてしまった。部活がある日は活動場所の体育館二階にギャラリがあふれることもあるという。

なんでそんなことになっちゃったのかなあ、とシオリは思う。

ちなみに、春の体育祭のとき、草木君はリレーなどで陸上部員に劣らない活躍を見せた。それを受けてまわりの人間が、弱小卓球部なんかやめて陸上部入れ、というようなことを言ったところ、自分は日陰が好きだから陸上部なんか入らない、と言い放った。

その突き放したような言い方をたまたまそばで聞いたシオリは、やっぱり昔のヒナ君はいなくなってしまったんだと思った。それに、自分のことまで否定された気がした。

シオリは中学時代は陸上部で、最終的には百メートルハードルを中心に打ち込んでいた。まっ黒に日焼けして、食事のメニューから睡眠まで、すべてが部活中心にまわってた。

特に抜きんでた才能はなかったが、県総体にも出場してそれなりの成績も残した。高校入学後は陸上部から勧誘を受けたが、運動部の活動自体があまり盛んではない学校のため、陸上部の活動も中途半端に思えたし、ある程度のやりきった感もあったから、結局入部しなかった。

シオリの場合、一台めのハードルをイメージ通りに飛び越せたときは、納得のいくタイムがでることが多かった。そのためか、今でも一台めのハードルを飛ぶ直前の夢をときどき見る。そのくらい、陸上に夢中の中学時代は充実していたと思う。

そのかわり、他の経験はあまりできなかったけど、その辺はこれから埋めていくのだ、と決意を新たにした頃には、ちょうど校門のあたりに差しかかっていた。

何か白っぽいものが落ちてる、と思ったら、スポーツタオルだった

た。たぶん、草木君のだ。さっきこけたときにでも落したんだろう。姿を探してみたが、見えるところにはいない。昔みたいに同じマンションに住んでいればすぐに届けられたんだけど、思いながらも明日教室でわたそうと、それを拾い上げた。

帰宅したシオリは、今から洗濯すれば乾くだろうと、タオルを洗濯機のところを持って行った。

そして、さりげなく、偶然そうなったみたいな感じで、タオルを顔に押し当ててみた。

うん。

よくわかんないけど、いい匂いかも。

そう思うと同時に、自分は今、何かに負けた、とも思った。

何か、自分の中を流れる血脈のようなものに。

翌朝、早めに登校したシオリは、めんどろだしやや後ろめたいので、袋に入れたタオルを黙って草木君の机の上に置いておこうと思っていた。

ところが、いつもギリギリにくる草木君なのに、その日に限ってもう登校していた。

しぶしぶ渡すと、特に感慨もなく「ありがとう」と言われ、ついてみたいに明日土曜日の予定を聞かれた。

そして気がつけば、草木君との会話はシオリのよくわからない展開になっていた。

「じゃ、あした、東口改札で二時ね」

白クマって白いよね、というような調子で草木君がそう言った。

「え？」

「ほら、タオルなくしたつもりだったから新しいの買わないと」

「あ、ああ、タオルね」

「遅れないでね」

「ちよつ、待つて、草木君。なんかよくわからないんだけど」

「キタジマさん。あのね。こういうのはね、疑問に思ったらそこで負けなんだ」

「負ける？」

昨日の洗濯機前での敗北感が頭をよぎった。

「そう、負けてしまうんだ。それでもいいの？」

「ええ？ それは困る、気がする」

「そうだよな」

「うん」

「じゃ、あした、東口改札で二時ね」

エベレストって高いよね、というような調子で草木君がそう言った。

「うん？」

明日二時にその場所に行けば会えるらしいということだけはわかって、会えるのは嬉しいからまあいいか、とシオリは思った。

それに、自分は何かに勝ったのだ、という揺るぎない達成感があった。

実際には、シオリは特に何かに勝ったわけではなく、するすると丸めこまれたただだった。しかし残念ながら、それには気付いていない。

草木君の方は、ヒナ君と呼ばれていた頃すでに、こういったシオリの丸めこみは割と得意だった。たいへん残念なことに、今も昔も、シオリはそれに気付いていなかった。

(4) 長かった

待ち合わせ場所にほぼ時間ぴったりに現れた草木君は、教室で見慣れた草木君そのままだった。なんとなくヒナ君的なものが見られるのではないかと、ひそかに期待していたシオリは、少し拍子抜けした。

たしかにその日、草木君はスポーツタオルを買った。ただ、それを買う時に草木君が何かシオリに相談するようなこともなければ、ましてやシオリがお金を払わされるようなこともなかった。

その後、特にこれといって会話をすることもなく、シオリは草木君が行くところについていただけだった。シヨッピングモールに入って、CDを試聴したり、DVDのパッケージを手にとったり。

これで楽しければ、世間一般でいうところのデートみたいだけど、思いながら、どうして自分は今日ここに來ることになったんだっけ、という疑問がシオリの頭に再燃していた。

「つまらない？」

「うん、そんなこともないけど・・・」

シオリの返事を聞いた草木君の顔は、表情が無くて何を考えてるのかよくわからない。

なんで二人でこんな苦行みたいなことしてるんだろう。わたしが相手じゃなければ、もっと楽しかったんじゃないのかな、とシオリは落ち込んできた。

「じゃ、今日はこのへんにしようか」

「うん」

そう返事をした途端にさびしくなってしまう。まだ待ち合わせてから二時間もたっていなかった。

少し肩を落としたシオリを見て、草木君が斜め前方のビルを指さす。

「あそこのビルさ、非常階段のぼると屋上まで行けるから、ちょっと大変だけど行ってみようか」

またなんか変なこと言いだしたな、とシオリは思ったが、なんだか離れがたくて、ついに行った。

そのビルの屋上からある方向を見ると、金網越しではあったが、それはシオリのマンションからの眺めによく似ていた。

まだ夕焼けは見えない、でも青空でもない、微妙な色の空が広がっている。こういう光の加減が、紫がかった色の雲も見える。

二人で並んで立って、遠くの空をぼおっと眺めた。

少し冷たい風が小さく吹いて、シオリの髪の毛が揺らされる。子どもの頃も、こうやって二人で空を眺めたな、とシオリは思いだしていた。

「ヒナ君の、じゃなくて草木君の今住んでるところは、眺めはいいの？」

少しほっこりした気分になったシオリは、昔の呼び方をしてしまったのを慌てて訂正して、隣りの人に聞いてみた。

「今住んでるところもマンションの三階だし、上の階には行ったことがないから眺めがどうかは知らないな。特に高いところが好きってわけじゃないし」

特に高いところが好きってわけじゃない・・・それを聞いた途端、ほっこりした気分は毛虫みたいにつままれて捨てられた。そして今度はこそ、今日は来なければよかったとシオリは思った。

一緒に遠くを眺めたりしたことは、シオリにとっては大切な思い出だったが、草木君にとってはそうではなかった。考えてみれば、別に驚くようなことじゃないけど、自分はそんなこと知らなくてもよかったな、と思う。

「でも、あのマンションの通路から、シオリちゃんと一緒に外を眺めるのは好きだったよ」

草木君のそのことばを聞くと、シオリは勢い込んで言った。

「わたしもだよ」

シオリとしては、今こそ喉にささった小骨を抜くことができるかも、と思ったわけだが、草木君は少し驚いたような顔をした。

「あの、キタジマさん。ここは照れて俯いたりするところでは？」

それはどういう意味かとシオリが考えていると、草木君が不意にふわつと笑った。

「変わってないね、シオリちゃん」

その笑った顔にくつきりと昔のヒナ君の面影をみつけて、シオリは、ああ、もう大丈夫だ、と思った。けんかは終わったんだな、と。

長かった。

シオリが感慨に浸って呆けてる間に、ヒナ君はさっさと次回の待ち合わせの約束をシオリに暗唱させ、シオリのケータイに勝手にアドレスを登録し、ほらほらこっちだよとシオリを先導して、帰途についたのだった。

(5) その橋は迷惑だ

週明けからいきなり「ヒナ君」「シオリ」と呼び合い始めた二人を、周りはバカップルだ卑怯者だと揶揄したが、元々周りの思惑から比較的フリーに生きてきた二人のこと、本人たちはその揶揄に気がつかないどころか、自分たちが変わったという自覚もあまりなかった。

実はさやかは、この二人が以前から意識しあっていたことに気付いていた。それもあって、シオリから相談したいことがあるというメールを受け取ったときに、「ヒナ君」がらみの相談だろうと予想はついてはいた。

放課後、人がいなくなったのを見計らってさやかに伝えられたシオリの相談事は、ヒナ君と手をつなぎたいんだけど、それはヘンタイか、というものだった。

「知らん」

さやかは一言答えてその場を去ろうとしたが、さやか自身はもうつないだのかと食い下がるシオリに、当然だつ、と頭を小突きながら答えてあげた。

「シオリ」

そのとき、教室のドアのところからヒナ君が声をかけ、たちまち二人の間に虹の橋がかかったのを苦い思いで見っていたさやかは、「チッ」とあからさまに舌打ちした。

そのさやかのしかめられた顔を見て微笑んだシオリを見て微笑んだヒナ君が、

「シオリ照れるなよ」

と言ったのを聞くに及んで、さやかはイスを蹴って教室を出ていった。

「今日はこれから部活なんだけど、一人で帰れる？」

「やだなあ、今までだって一人で帰ったりしてたんだから、大丈夫だよ」

「たまには見学してけばいいのに」

卓球をしているのはヒナ君ではなく草木君で、かつこよすぎてつまらない、と言わないだけの常識をシオリはぎりぎり持っていたので、あいまいにほほ笑んでごまかした。

「じゃあ、気をつけてね」

「うん、ヒナ君もがんばるんだよ」

手を振ってわかれた。

一人で昇降口を出て校門の方までゆっくり歩くと、校門を出た途端に、シオリの前を歩いていた一年生らしき二人が手をつないだ。

それを見て、なんとなく人恋しくなる。シオリはぎりぎりまでコートを着る気はないが、風も日に日に冷たくなってきている。肌寒さをもものもしない感じの前の二人に、シオリは軽く邪念を送りながらも、また昔のことを思い出してしまった。

中学一年のやつぱり今頃の時期、シオリは一度だけヒナ君を見かけたことがあった。

最初は、見たことあるような人だな、と思った程度でヒナ君とはわからなかった。今の草木君ともまた違う感じだったが、シオリの知っていたヒナ君とも、まったく違って見えたからだ。

それでも気がついて声をかけようとしたのだが、ちょうどそのとき、同い年か少し上ぐらいの、華奢な感じの女の子がヒナ君に近付いて、するつと手をつないだ。

それを見たシオリは慌てて物陰に隠れた。自分は部活の大会かな

んかの帰りで、埃っぽいウィンドブレーカーを着て大きなスポーツバッグを斜めがけていた。よく日焼けしていたし、男の子と間違われることすらあった。今までそんな自分を恥じたことなどなかったのに、いかにも女の子なその子と自分を較べて、恥ずかしくなっていたのだった。

仲が良かったころは、まだ小さかったから、自分たちもよく手をつないだりしてたけど。でも中学生で手をつなぐってことは、単なる仲良しってわけじゃないんだろ。そう考えて、さびしいような、うらやましいような気持ちにもなった。

実際には、まだ成長途中のいわゆる美少年な時代のヒナ君は、女子に手を握られたり、ひどいときには抱きつかれたりすることがよくあって、そのときもちょうどそんな感じだった。

面倒だからと、来るものは拒まず的のところもあったので、そういった攻撃はヒナ君がもうちょっと成長するまで続いたのだったが、シオリはもちろんそんなことは知らない。

ええっと、さやかのお墨付きももらったし、どうやったら自分もさりげなく手をつなげるだろう。

頭の中で、めまぐるしくそんなことを考えはじめたが、結局なにも思いつくことができないままに家に着いたシオリだった。

(6) 動物園が、バナナワニ園が

動物園。どうぶつえん。

二人が親しく口をきくようになってから、ほぼ三週間がたっていた。その間、都合が合えば一緒に下校したり、近場で待ち合わせてちよつとした買い物をしたりはしていたが、休日にわざわざ遠出（というほどでもないが）するのは、今日が初めてだった。シオリが誘われたのは動物園。ヒナ君は動物が好きだったかな、とシオリは過去の記憶を探るが、よくわからない。

二人で動物園で、なんだか恥ずかしくないですか、という気持ちと、なんでもいいから一緒に嬉しい、という気持ちがせめぎあい、シオリは現在、こびとづかんみたいな顔つきで待ち合わせ場所に立っていた。

行き先の動物園は、あまり立派でもきれいでもないはずだが、入園料だけは格安だ。小学校四年生の頃だったか、シオリは家族でその動物園を訪れたことがある。ここから電車と徒歩で四十分程度かかるが、その間にいろいろな話もできると思い、シオリはそれも嬉しかった。

昨日の夜は、遠足前の子どもみたいに、シオリはなかなか寝付けなかった。今日だって約束した時間は十一時だったが、その三十分以上前に待ち合わせの場所についてしまった。

ヒナ君が来なかったら・・・、いやそういう場合はしょうがないから一人でジェラートでも食べて帰れば来た甲斐はあったなどと、待ち合わせの時間までまだ間があるのに、すでに落胆しないための準備まで始めてしまっていた。

時間の十分前にはヒナ君の姿が見えて、ようやくシオリも安堵した。シオリに気付いたヒナ君が、ふわつと笑う。小さく手をかがげている、その腕の角度がきれいだな、とシオリは思った。

「ヒナ君、来れてよかった」

「ん？ 何かあった？」

電車の事故でもあったのだろうかヒナ君は思ったが、いやそれよりも重要な話があったんだと、歩きながら話を始めた。

重要な話とヒナ君は思ったが、内容としてはくだらないものである。要するにヒナ君という呼び方は「草木君」よりはいいけれど、小学生のときと同じというのもなんだから呼び方を変えて欲しい云々だった。

シオリとしても、さやかなんかの前でヒナ君と言ったときの冷たい視線を思い出し、呼び方を変えれば少しはましになるのかも、と歓迎の意を表した。

結局、シオリはヒナタ君、と呼ぶことにした。君をつけるかどうかでどうでもよい感じの見解の相違はあったが、そこはシオリの意見がとおった。

というわけで、シオリとヒナタは、休日と比較的すいていた電車に乗った。比較的すいている、とは言ってもあいにく二人並んで座れるほどではなかったため、ドア近くに立っていた。

走る電車の窓の向こうには、うろこ雲を浮かべた色の薄い空が見える。

今日の天気は晴れ、動物園びより。

「そっいえば、今でもカミナリ怖いのか？」

窓の方を見ていた視線をヒナタにうつして、シオリが聞いた。

「カミナリ？ ああ、今はそうでもなくなったかな」

クラスの男子の乱暴な言動には淡々と対応していたヒナ君だけど、カミナリが鳴るとすぐ怖がった。だから、よくなだめてあげたんだ。シオリは思い出して、ヒナタを生温かい目で見やった。

一方、ヒナタも思い出して、シオリを生温かい目で見返した。

カミナリが鳴って驚いたことがあった。怖がっていると勘違いしたシオリが、それ以来、自分を抱きしめてなくさめてくれるようになった。ふるえていたのはシオリの方だったけど。

カミナリが鳴ったとき、コガネムシが子ども部屋に入ってきたとき、ヒナタが転んで膝から血を流したときも。いつも本当におびえていたのはシオリの方だったが、なくさめるのもシオリの方だった。ヒナタはもちろん、名より実を取るタイプ。縋るような目をしたシオリがなくさめてくれる（つもり）という状況を手放す気はなかった。だから、あの頃のヒナタはシオリの勘違いを訂正する気もすっぱりなかった。

それは別に後悔していなかったが、ビルの屋上での和解（？）以来、昔みたいに姉のような言動を条件反射的に見せるシオリを、ヒナタは少し複雑な思いで見ってしまう。

やさしくて、元気で、最後の詰めが甘いシオリちゃん。
本当のことを知ったら、それこそスク水事件のときのように、すさまじく怒るんだろうな、と。

もうカミナリは怖くないという返事を聞いて残念そうな表情をしたシオリだったが、それではと、もう一つの疑問を口にした。

「動物園ってちょっと意外だったんだけど、昔から動物好きなんだっけ？」

まだ「ヒナタ君」と呼ぶことができなくて、どうしても主語を省いた会話になる。

「別に好きってほどじゃないけど、あの動物園、モルモットがたくさんいるから。シオリ、モルモット好きだったよね？」

「モルモット？」

あの動物実験の？　と思つて首をかしげた。

「ええと、シオリ。ここも照れてうつむくところでは？」

シオリは内心の小さな苛立ちが外にでないよう気をつけて答えた。
「ごめん、それ、わたしじゃないよ」

「え？　じゃ、もしかしてアレ、シオリの兄貴のだったのかな。部屋に大きなぬいぐるみ、置いてあったよね？」

「ああ、あのココア色の・・・」

シオリのところが再び生温かい感情でみたされた。そんな人の罪悪感をくすぐるような動物のぬいぐるみが存在すると思うなんて、ほんとにヒナ君らしい。

「あれはね、カピバラ。それと、ぬいぐるみじゃなくて抱き枕」

「カピバラ？　モルモットとは別の生き物？」

「うん。でも、いろいろ考えてくれたんだね。ありがとう。それに、一緒だったらバナナワニ園でもうれしいよ」

そう言うてにこにこしているシオリを見て、ヒナタがつぶやいた。
「今まで無事でよかったね」

「ね」ということは同意を求められたのだろうが、意味が分からなかった。なら、せつかくだから、照れてつつむくをやってみるかと思つて、シオリはそうしてみた。

そんなシオリを甘く微笑んだヒナタが見守る。

これをさやかが見ていたならば、おまえらワニに食われてしまえ、と言つたであらう。

(7) 右手の行先

電車がとまって、シオリ達が立っている方のドアが開いたので、人の乗り降りの邪魔にならないように二人は場所をあけた。気がつけば、次の停車駅が動物園の最寄り駅だ。

再び動き出すときに電車が揺れて、その瞬間、シオリはあることを思いついた。

そうだ、電車が揺れたときに、よろけたフリをして手をつないでしまえばよいのでは。

が、しかしである。ハードルのおかげなのか何なのか、シオリの電車内での安定性は抜群だった。

これはヒナ君がよろけるのを待った方が早いかも、そう思ったときに電車が傾いで、シオリは、つい、うっかり、ヒナタの手をとってしまった。よろけたりはしなかったから、非常に唐突な感じで。

つながれた右手と右手。

これをさやかが見ていたならば、それなんの握手、と言ったであろう。さやかでなくても、人はそれを握手と呼ぶ。

せめて反対側の手をとれなかったのか・・・呆然としながら、手を離すこともできず、シオリは思った。このあいだ、お笑い芸人がおんなじようなことネタとしてやってたよ。なんで肝心のところでこうなっちゃうんだろう。

一方、ヒナタにはシオリが考えていたことがなんとなくわかってしまい、シオリらしいと吹き出したかった。だからといって、笑ったりしたら大惨事になるのはわかっていたから、なんとか無表情を保っていた。あらためて今まで無事でよかった、と思いながら。

結局、次の駅に着くまで二人は無言で握手していた。はた迷惑な

話ではある。

とまった電車から降りるとき、右手と右手は自然に離れた。

シオリの右手は、もう一度つなぐ手を探しそうになってから、あきらめて自分の反対側の肘をつかんだ。

先に早めの昼ごはんを食べようと、二人は動物園の手前の店に入った。

シオリは朝、ヨーグルトを少し食べただけだったが、あまり何かを食べる気がしなかった。ヒナタは目の前であっさり食べ物を胃におさめていくので、ほとんど感心しながらそれを見ていた。これだけ食べれば、大きくなるはずだ。

おととい、昨日と、こういうときはお弁当をつくったりすべきなのか、と実は迷ったのだ。でも、不器用な自分がつくれるものを考えて、誰かがそれを食べる姿を見るのって拷問だよな、と思ってやめた。今になって、やめといてよかったとシオリは思う。自分がつくったものをこうもすいすい食べてくれるとは、やっぱり思えなかった。

店を出て少し歩くと、黄色い看板が見えてきた。そこはもう、動物園、どうぶつえん、なのだった。

その動物園は、シオリのおぼろげな記憶にあった印象よりも広々としていた。ただし、入口でもらった園内マップを見る限りでは、動物園というより、森林公園とでも呼ぶ方がふさわしい場所のようだった。

園内にいる動物は、アライグマやタヌキなどの小型の動物と、なぜか鳥類が多いようだった。マップのちょうど中央あたりに、モル

モットなど小動物がいるらしい、触れ合い広場という場所がある。
ヒナタが言っていたのは、これだろう。

園全体が、雑木林を切り開いて動物などを配したようなつくりになっ
ていた。

まだ紅葉には少しだけ早いのか、くすんだ緑の葉をつけた木々が、
さやさやさと、葉をならしている。その更に上の方から、檻の中
に入らずにすんだ、小鳥の鳴き声が降ってくる。

足元を見れば、木の葉の隙間がつくる小さな日向が、枝が揺れる
のといっしょにちろちろと揺らめく。風は少し冷たいが、ただ歩く
だけでなごんでしまいそうな場所だ、とシオリは思った。しかも隣
りにはヒナタがいる。

ここからそう遠くない場所に、展示の仕方が斬新だと評判の動物
園が新しくできたせいか、それほど混雑もしていなかった。子ども
が多いのだろうというシオリの予想に反して、むしろ、大人とい
うか、大学生か新社会人といったあたりの年齢の人たち多く訪れて
いるようだ。

その中の少なくない割合が二人連れで手をつないだりしていたの
で、シオリはタカ目タカ科の鳥だのフクロウ目フクロウ科の鳥だの
に鋭い視線をむけて集中した。

足を止めて動物たちの様子に見入っていると、すぐ隣りに立っ
ているヒナタから体温の波みたいなのが届く気がする。昔はなかつ
たこんな感覚は、何もヒナタの体温が成長によって上昇したからで
はなく、自分の意識が変わったせいだと、シオリもさすがに気付い
ている。

手をつなぐと言ったって、もう小学生ではないのだ。ヒナタには
その手を振り払う自由も意思もあるのに、それは無視したままで昔
みたいに仲良くって、自分はいっただうしたいんだろう。

どうしてヒナタと一緒にいたいと思うんだろう。昔のヒナ君がバカでもヘンタイでもなかったから？　自分はどんどんそうなっていくのに？

だいたい自分は、どう思われているんだろう。

喉にささった小骨は抜けたはずなのに、胸にはもう新しいトゲが生えている。このトゲは、抜いても抜いてもまた生えてくるのだ。気がつけばシオリは、ハリネズミ目ハリネズミ科の動物をぐりぐりと睨みつけていた。

しばらく動物のいない静かな道を歩いていくと、なんとなくにぎやかな空気が感じられた。どうやら触れ合い広場が近いようで、さすがに子どもが多いみたいだ。というか、そもそも完全に子ども向けの場所だろう。

うさぎ、モルモット、ハツカネズミなどが囲いの中で放し飼いられていて、それらを触ったり膝に抱き上げたりできるようになっている場所。囲いの中に入っているのは、ほとんどが小学生か、それより小さい子どもだが、中にはバカップルな感じの大きいお友達も混じっていた。

シオリはこういう場所のうさぎやなんかは実は苦手だった。疲れた目をして呆然とした感じの小動物が、気の毒でもあり、怖くもあったから。

そういえば、前に家族でここに来た時。

小学生の自分が触ろうともしなかったのに、中学生になった兄がうさぎを追っかけまわしていた。確かに兄は小動物好きだが、他が小さい子ばかりだったから、かなり目立ってたな。

囲いの中に入ろうともせずつつ立ったまま、シオリがそんなこと

を思い出していると、なんだか体の右側がぼんやり温かくなった。さっきまで左側を歩いていたらヒナタが右側に移動していたせいだった。

そしてヒナタはけっこう熱心に広場の中をのぞきこんでいる。実は小動物好きだったのか？

「ここはいいの？」

ヒナタがちょっと首を傾けるようにして聞いた。

「うん」

シオリは答えてしまってから、モルモットを膝にのっけてうふふふ、をやるべきところだったかと反省した。ヒナタが少し残念そうな顔をしたように見えたから。

モルモットはシオリの記憶にあったより小さくて、でもさすがどちらともネズミの仲間、見た目はたしかにカピバラの抱き枕とそっくりだった。

(7) 右手の行先(後書き)

ここまでありがとうございました。次話が最終回となります。

(8) モルモットとサイダーの泡 (完)

歩きどおしだったので、さすがにシオリは少し疲れた。足がというより、気分的なものかもしれない。ベンチがあったので、少し休むことにして並んで座った。

今いる場所が園の中央より少し奥に入ったあたりで、ここから先は、あまり動物はいないらしい。

少し散歩してから、来た時とは別のコースをたどって帰る感じになるのかな、とシオリは見当をつけた。ということは、ちょうど半分くらいの時間が終わってしまったのか。

隣りを見ると、視線を感じたのか、ヒナタもシオリの方に顔を向けた。

「疲れた？ 今日シオリ、しずかだったね」

「そうかな。ちょっと思索の森に踏み込んでみたからかも」

考えてもしようもないことを考えて、ずいぶん貴重な時間を無駄にってしまったとシオリは思った。

「やっぱりモルモットとか、あんまり好きじゃないでしょ」

「うーん、そういうわけでもないんだけど」

「シオリのことは何でも知ってると思ってたけど、そうでもなかったな」

ヒナタは言ってから、明らかに、あ、失言、という顔をして目をそらす。

「その自信、どこから来るの？」

「自信？ 自信なんて、あたりなかったり」

なんだその答えは。こういうのは面倒なんだろうけど、だからってさっきの発言はどうなんだ。

この三週間ほどの間、ごくまれにだが、シオリは今みたいにピキッとすることがあった。なんとなく自分とヒナタの立ち位置に關す

る話題がよろしくない気はしていたのだが。

少しむっとした顔を向けると、逆にじっと見つめられて、今度はシオリが目をそらした。

「やっぱりモルモットのところ行つとけばよかったかな」

へ？、とシオリは思う。今度はなんの話だ。

「モルモットって、さっきの触れ合い広場の？」

「うん、まあ」

なんだ、別にわたしのためじゃなく、ヒナタ自身がモルモットずきだったのかと、恥ずかしい勘違いに赤面したシオリは慌てて立ち上がった。

「じゃ、戻ろうよ」

「シオリ」

急いで戻ろうとしたシオリだったが、それより先に進めなかった。ヒナタがシオリを抱きしめたせいで。

シオリの体を引きよせて、ヒナタが髪に顔をうずめた。シオリのことばも思考も形にならずに、どこかに散ってしまう。

子どもの頃は、もっと半分半分に抱きあう感じだったのに。

白く飛んだシオリの頭に、最初に浮かんだのはそんなことだった。今は、なんだか動けない。まわりをぜんぶヒナタに囲まれてる。

そのことに、今さらながら焦ってしまう。

ヒナタの顔が離れる気配がして、指が髪をすくように頭を撫ぜた。これは、ヒナタの匂い。シオリの鼓動はぶんぶん鳴るほどにうるさくなっていく。

うるさい鼓動の中から唐突に、好きだな、という気持ちがわきあがってきた。

・・・サイダーの泡って、きつとこんな気持ちで次々のぼっていきんだな。

「モルモットみたいに、小さくて、あったかくて、震えてる」
すぐ耳元で、いつもより少し低いヒナタの声がした。

近すぎる声。それを意識して、ようやくシオリの戦闘意欲が呼び戻された。

モルモットみたいって、それは絶対ほめられていないよね。

「あの」

文句を言おうと、シオリは顔をあげた。見上げた先にある相手の顔は、草木君ともヒナ君とも違うように見えて、ことばの続きは今度も散ってしまう。

とりあえず、とシオリは思った。モルモットなら自分から抱きつくことはできないけど、わたしは人間でよかった。

シオリはヒナタの肩に額を落とすと、おずおずとその背中に手を伸ばした。

それから二人は、黙々と歩いた。それまでよりは、だいぶゆつくりと。

しばらくして、こっちのルートだと触れ合い広場を通らない、ということにシオリは気付いた。

「このまま行くと、モルモットのところに戻れないよ」

「モルモット？ シオリ、やっぱりモルモット好きだった？」

「そうじゃなくて、さっき行けばよかったって言ってたよね」

それを聞いて、ヒナタは昔のヒナ君みたいに笑うと、先に歩きだしてしまった。

ヒナタの背中を見ながら、そうだ、きちんと確認しておかなくては、とシオリは思った。

半歩後ろから声をかける。

「あの、ヒナタ君。さっきのあれは、わたしのことを好きっていうことでよろしいか？」

ようやく名前を呼んだかと思えば、その妙な口調はなんの真似だ、

とヒナタは思う。

「好きじゃなければ、なんだとってたの？」

足をとめて振り返ったヒナタが、逆に問い返した。

「なんだ？　なんだろう・・・」

「で、自分はどうなわけ？」

二つめの質問は耳に入らなかったらしく、なんだ、なんだ、と真剣に考え出してしまったシオリを、ヒナタは少し困った顔をしている。

そのとき着信音が鳴った。ヒナタのケータイだった。まだ考えているシオリの横で取り出して見てみると、卓球部友から「日程変更に関する緊急連絡」と、珍しくまともなタイトルのメール。

今日ここにシオリと来ることをすっかり漏らしてしまって、そのときはだいぶ嫌がられたのだが、試合の組み換えか何かを教えてくれるつもりだろうか。

ヒナタが改行だらけの画面をスクロールしていくと、画像が見えた。つまりそれは、女豹的な、要するにそういう画像だった。やられた。

気がつくと、シオリが生温かい目をして画面を覗きこんでいる。

「相手がヘンタイだろうがなんだろうが、好きになるときはなってしまうんだね」

悟ったようにシオリが言った。

最初の部分はおかしいだろう。でも、今のも告白みたいに聞こえないこともない。だからまあいいか、とヒナタは思った。

さやかが見ていたならば言ったであろう、おまえら恥ずかしすぎる、いったい何がまあいいかなのか、と。

シオリとヒナタは手をつないで、また歩きだした。

夕焼けがはじまるまでに、あとまだもう少し。

おわり

(8) モルモットとサイダーの泡 (完) (後書き)

どうもありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1671y/>

モルモットモード

2011年11月20日03時14分発行